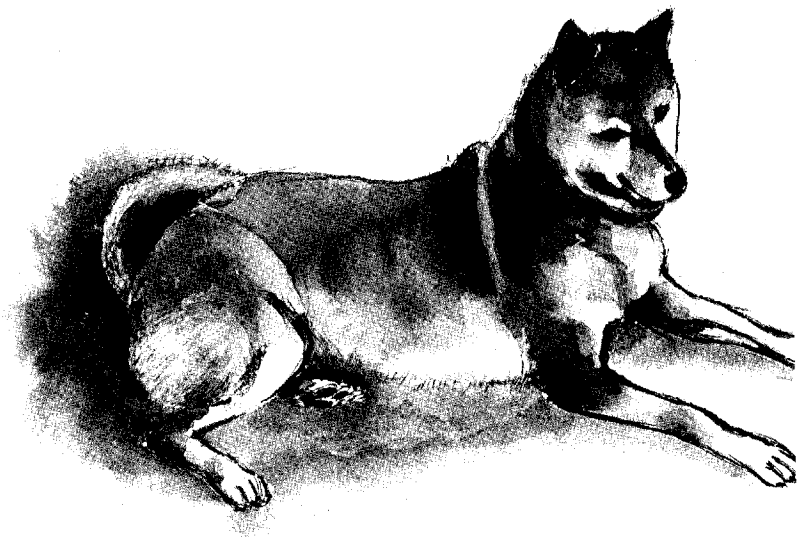


季刊 連句 第11号



「猫蓑会」とそのお仲間（南柏雑記9）	1
第二回 昭和六十年武翁賞決定発表	2
連句の読み方・味わい方（三）	東 明 雅 …… 8
—「木のもとに」の巻一	
牛耳伝（4）	杉 内 徒 司 ……12
絶頂の城 付勝練習歌仙	……14
第5回 俳諧芭蕉忌	第15回 猫蓑会 ……16
初時雨 脇起り六歌仙	
（捌）櫻井天留子 氏原 正雄 中島 啓世	……16
式田 和子 福井 隆秀 秋元 正江	……18
芭蕉庵連句教室 火の帯	中 川 哲 ……20
草紅葉	井手 樺晴 ……20 不知火 ……川野 蓼艸 ……20
花野連句会 露時雨	小 出 きよみ ……22
さざなみ連句会 濃 竜 胆	杉内 徒司 ……23 初秋（膝送り） ……23
興流連句会 二日月	馬場 彬風 ……24 柿の実 ……馬場 彬風 ……24
鼎 三吟 鶏頭	岩 淵 喜代子 森 玲子 磯 辺 まさる ……25
電通会連句部 夜 永	山 口 美 恵 ……26
柏連句会 秋惜しむ	武藤 禎夫 ……27 穂 芒 ……井手 樺晴 ……27
質疑応答	……28
連句会案内	……29 雁吊往来 ……29

表 紙（柴犬）宮崎 龍火子

「猫蓑会」とそのお仲間

南 柏 雑 記 9

昭和五十六年四月、朝日カルチャー・センター（A・C）で連句入門の講座を担当するようになってから、そのころ満五年が近づいている。この間、何人の人をお教えして来たことだろうか。俳句が百万とも言われる人口を擁して、未曾有の繁栄を誇っているのに比べたら、物の数でもないけれども、それでも今までは全く無視され、黙殺されていた連句というものの復活の気運の一端をにたったことは確かであろう。

俳句も同様だが、連句では特に、その伝播の中心になる、いわば核となる人が必要である。そして、その核となる人は、何年か連句を習い、自分でも捌きのできる人である。明治以後、連句が急速に衰えたのも、その捌きのできる人が、次々に老齢となって死に絶え、その補充が全くなされなかったところに、その原因がある。

だから、A・C・Cの連句教室の目的は、いかにして多

くの捌き手を養成するにかかっていた。その目的は約半歳で達成されたが、A・C・Cを卒業された方たちからの要望で「猫蓑会」が生まれ、ここからも優れた捌き手が続々育っているのは力強い限りである。

本号ではその「猫蓑会」の作品が六つ掲載されているが、これは十月十六日、深川の芭蕉記念館で興行したもので、何れも三時間前後で歌仙六巻が揃ってめでたく首尾されたのは、「猫蓑会」の実力を示すものであろう。

また、小出きよみさんの指導されている松本市の「花野連句会」、杉内徒司さん指導・笠原古睦さんの率いられる「さざなみ連句会」、馬場彬風さん指導の「興流連句会」、森玲子さんたちの「鼎連句会」、吉田憲助・山口美恵さん中心の「電通会連句部」、そして、「芭蕉庵連句教室」（第一日曜・文京区関口芭蕉庵）と「柏連句会」（第三日曜・柏市光ヶ丘近隣センター）の作品などは、いわば「猫蓑会」と兄弟の関係にあるので、この際、全部を御披露することにしたが、このように捌き手がどんどん増えることは嬉しい限りである。

# 第二回 武翁賞決定発表

(昭和六十年度)

## 二十韻 「青しぐれ」

文音 福井隆秀・坂本孝子

## 歌仙 「風花」

文音 川野蓼艸・秋元正江

賞状 副賞 各五万円

選考委員 東 明雅  
草間 時彦  
杉内 徒司

武翁賞 候補作品  
二十韻 (一)「青しぐれ」文音 福井隆秀・坂本孝子  
(二)「口笛が」鈴木春山洞捌  
歌仙 (三)「二の酉」川野蓼艸捌 (四)「風花」 文音  
川野蓼艸・秋元正江 (五)「爽籟や」膝おくり四吟 福  
井隆秀・内田麻子・中川哲・式田和子 (六)「秀雄忌の  
梅」 文音 馬場東夷・福井隆秀 (七)「櫻散る」 文  
音 坂本孝子・米谷貞子 (八)「萩の糸」 文音 馬場

彬風・原田千町 (九)「朝の道」 膝おくり 上月淳子  
・氏原正雄・山口みづゑ・大窪瑞枝・坂本孝子・米谷  
貞子・雑賀遊 (十)「唐黍」 式田和子捌 (十一)「桜餅」  
文音 馬場東夷・式田和子 (十二)「夏わらび」 小出き  
よみ捌 (十三)「夏燕」穴澤篤子捌 (十四)「初御空」 氏原  
正雄捌 (十五)「初席」 中田あかり捌 (十六)「海くれて」  
市野沢弘子捌 (十七)「緑蔭」 原田千町捌 (十八)「夏めき  
し風」 富田一青子捌

## 二十韻 青しぐれ

文音

下町の寺めぐり来て青しぐれ  
花菖蒲濃く咲きし坪庭  
リサイタル控へし胸の弾むらん  
間違ひ電話受話器置くなり  
「須磨明石」まですすみけり月の卓  
鳥屋師ひそかに山へ入り行く  
鮮血のごと菜萸の実のたわわなる  
聞く耳もなし親の止めだて  
パトカーを振りきる彼にしがみつぎ  
すつきり晴れしペンションの朝  
外交の苞は自信の俳句集  
樽で買ひたるワイン毒入り  
北斎の遠く小さく富士が見え  
罌にかかりし子狐の月  
裸木を抜けて佇む雪女郎  
しばれる宵の熱きくちづけ  
生涯の憶へば眩しひととこ  
永き日の父棋譜をかたへに  
舟唄に花散りかかり最上川  
音無く吐けるお蚕様の糸  
昭和六十年七月十四日 起首  
九月 六日 満尾

隆秀  
孝子

孝秀

福井 隆秀  
坂本 孝子

## 選考経過

明雅 武翁賞を九月二十日切った時点で、二十韻二つ、歌仙三つ、三ッ物ひとつの応募がありました。これは少なすぎますので、いままでの内から、まあまあと思われるものを入れて、十八を選考の対象にしました。(別掲)一五迄が応募作品です。二十韻は応募が少ないですが、二十韻と歌仙とは対等の形で賞を差上げようと思いません。昨年は賞が出ませんでしたので、今年は是非出したいと思えますので、よろしく願います。

徒司 ひとつずつやりますか。

明雅 大ぶるいにかけていきましょう。

徒司 では初めから。「口笛が」は、色、飲物、歩行体の打越しなどがあるので、「青しぐれ」のほうをとりたい。それから、「二の酉」「風花」を残したい。「爽籟や」は、表六句を厳格にみると、第三がいささか。止め方が気に入らないな。

明雅 君が残したのは「青しぐれ」「二の酉」「風花」だね。

徒司 「秀雄忌の梅」「櫻散る」を残し、「唐黍」は私が入っているから無資格。「桜餅」を残す。

時彦 わたしはそんなにとらなかつた。二十韻は「青しぐれ」「口笛が」はなんとなく雑です。二十韻の宿命かもしれないが、純粹の景の句が乏しいために、三十六句の抜粋版のようになってしまいました。

歌仙

風花

文音

風花や鷹匠の目は瞬かす  
寒林抜けて入りし寒林

正 蓼 艸  
江 艸

暖炉燃ゆヴィオラの音をからませて  
塗りこまやかなバステルの彩

月光に濡れる起重機・黒運河

野塘蒿の胸の高さに

柿一つ下げ回りたる宇陀の里

根落とせし僧の老いたる

湯殿には湯浴みの気配きこえてきて

ベネチアングラスにとかす錠剤

ダリの絵の金の蛾ばさと抜けて出る

鍾乳洞を染める夕焼け

少年と小犬と月と濃あぢさゐ

垣根に結ぶ文のおさなく

脚線を誇示して軽きタップ踏む

伝法院に近き路地裏

花明り黄泉よりのひとつうっすりと

胡沙きたるらし急ぎゆくなり

菜飯食ふ上り榎のつや深く

窓いっぱい湖のうららか

対岸の混声合唱フォルテシモ

眠る吾妹の耳の真珠よ

かくれ家を抜けて消えたる煙草の輪

ブリキの太鼓叩く人形

あつい夏つめたい夏を過ごしゐて

夢に真白の帆船が行き

佗助を活けたる床のほの暗く

腹かき切つて息絶えてをり

後の月結城紬をふうわりと

微醺のほてり撫つる爽涼

秋祭すみて閉ざせし傀儡倉

お金のことは馬と相談

ゆきひらの煎じ薬を注ぎつつ

海市ひろがる越中の海

花ぐもり婆の背負籠ならびたる

いざ和し給へ春愁の笛

昭和五十八年十一月二十六日 起首  
昭和五十九年十二月十七日 満尾

川野 蓼 艸  
秋元 正江

明雅 そうです。そこを、これから新しい芸術として考  
えなくてはならないと思います。

時彦 投稿のものから順番になっているのですね。その  
中からは「風花」をとります。これは割に言葉を吟味して  
使っています。あとは「樺散る」です。少し言葉が華麗す  
ぎますが。次に「桜餅」割に上手いじゃないですか。あと  
は「初席」「海くれて」そんなところでしょうか。あと  
明雅 僕が考えてきたのは、「青しぐれ」「風花」「樺  
散る」「桜餅」です。

二十韻は三人一致したから「青しぐれ」でしょう。  
徒司 僕は必ずしも賛成しない。二十韻より歌仙のほうが  
いいものがいっぱいあるから。だけど、方針として二十  
韻から出すとすれば決まりだね。

時彦 二十韻がひとつ賞になれば、来年から二十韻をや  
る人が増えます。  
徒司 では、奨励の意味でも、これで決定ですね。  
時彦 そうです。  
徒司 それでは歌仙のほうが。

時彦 「二の酉」は、言葉を使いきるので。あとへ  
続くものを考えるというより、自分の句をきらめかそうと  
しています。「風花」は佳い。「秀雄忌の梅」はどうかな。  
前半も後半も若い人を出した句が出て、平板になって損を  
しているのではないですか。

徒司 作者が似ているからかな？  
時彦 作者は僕は知りませんが。

明雅 「樺散る」は華やかすぎます。  
時彦 片仮名が多すぎ、ピーターパン、シンデレラ、ヴ  
ィバルディーなど、キラキラさせています。  
明雅 それに較べると「風花」は面白いよ。落着いてい  
るし、序破急もあり、俳味がある。  
時彦 言葉に対して敏感です。  
明雅 「樺散る」は、才女お二人がやりあっているのは  
見事ですが、あまりやり過ぎの感もあります。  
徒司 お二人が推奨したのは僕も同感。「二の酉」「風  
花」は同じような作者で「風花」落着きあり。「二の酉」  
は落着きなして「風花」を残し、「秀雄忌」はご賛成がな  
いので引込めます。そうすると、「風花」「桜餅」が自然  
に残りました。僕は、選ぶとき作品だけで選んでいいか疑  
問です。連句だから捌きの力量などを選考の基準に入れた  
いと思うけれど。

時彦 捌きでやるのと、何か月もかけてやる文音とは違  
うと思いますね。しかし、そういう意味では残った二つは  
同じ条件です。そして、どちらかといえば「風花」を買い  
ますね。「桜餅」のほうは、「いい日旅立ち」とか、舞台  
が多すぎ、読者を意識しすぎていると思います。  
明雅 こういう作品もある、ということを出してもいい  
が、「風花」のほうが正調猫養としていいと思います。

徒司 「桜餅」はしっとりとした感じがありませんね。  
明雅 それでは、だいたいこれでいかがでしょう。  
時彦 これでいいんじゃないでしょうか。

明雅 二十韻「青しぐれ」歌仙「風花」決まりました。

## 文音と捌き

明雅 それでは、作品の批評をすこし。

時彦 今回は二つとも文音になってしまったけれど、本当は誰かが捌いたのが残らなければいけないでしょうね。

徒司 捌いたほうの作品は、連衆を選んだわけでもなく、玉石混じりです。これはこういう会の宿命でしょう。今の処は止むをえませぬね。

明雅 これから、文音がはやるでしょうね。

徒司 今後、文音でないのが望ましいですね。

時彦 「捌き賞」というのがあってもいいなあ。この二つは群を抜いているから仕様がなくてもいいがね。

明雅 連句鑑賞のやり方として、芦丈先生のお言葉のように、玉が転ぶ、すなわち、つけ肌つけ味がいい、転じがいい、その中に良い句がひとつ二つあればいいわけです。この二十韻は、序破急が上手くついている。三句目のリサイタルもよく、ウラに入って、「須磨磨石」の次に恋を出さずに山へ入りとし、恋を待ち、茶黄で景を出し、次に激しい恋を出し、ペンションで気分を変え、時事句を出し樽を上手くつけ、北斎の富士に転じ畏から雪女郎、しばれる宵のくちづけもよく、述懐も入って穏やかに納めた調子と、上手さ、落着きを買いました。

時彦 特にありません。おっしゃる通りです。「風花」

は、前半ぐっと控え、ナオに入ってからぐっと盛り上げたところ良し。言葉ひとつひとつを割に大切にしていますね。それがいいと思う。

明雅 佗助から腹かき切つてに続くところがよい、脇と25句目がちょっと似たような発想と思いますが、この位離れていればいいでしょう。

時彦 14・15・16がちょっと崩れているな。

明雅 26と35が絶品と思うね。

時彦 タップ、ブリキの太鼓、ヴィオラ、笛などと、音楽が五つも出たのはちょっと気になる。

徒司 この位できれば文句なし。だが一年もかかったのは長すぎるね。

時彦 連句は座の文学ですから、文音でなく、捌かれたもので、いいものが出るのを望みますね。それには、捌きの技術をあげることに。捌いたものをもう一度見直す方法なんか考えたいね。それに、しいていえば、今回は優等生の作品ですね。全体的に哀れさが少く、華麗すぎる。

明雅 ラインダンスですね。俳味のあるのは、「お金のことは馬と相談」の一句だけでした。

これで一応、A・C・C猫装を代表する二巻が出ました。来年は捌きでこの位のもが出ることを希望して終了させていただきます。

## 受賞者のことば

福井隆秀 「青しぐれ」の巻は、深川漫歩のときのあと、この時の句で巻こうということで始めました。思いがけない受賞で驚いています。孝子さんは校合が厳しく、芭蕉もこうして磨き上げたのかな、と思うほど作品に神経を使われるので、いい勉強になりました。

坂本孝子 あまりの光栄に、気のきいたことは中上げられませぬわ。そうですね、受賞の「青しぐれ」の中の生涯の憶へば眩しひところ

この句がびつたり、ひとときの栄光でございます。

川野蓼艸 まったく意外、青天の霹靂。とんでもないことになりましたなあ。従来、何の地下もなく、重量あげとマラソンしか興味がなかったのが、眼底出血して運動禁止になって、五十七年三月から連句の道を走っているわけです。始めは俳句で、ヤ・カナはいけないの、切字とは何だ、という処から入門しましたので、ほんとうにびつくりです。「風花」は一年がかりでした。正江さんは輝かしい方ですの、驥尾に附したという感じです。

秋元正江 ただ、びつくりするばかりです。文音の上で、ウマを合わせて頂いたというか、蓼艸さんの句に「お金のことは馬と相談」とありますが、いろいろ相談して付けさせて頂きました。ありがとうございます。

## おめでとうございませう

三井 嫩子

(故三井武翁氏夫人)

「青しぐれ」「風花」二巻ご受賞おめでとうございませう。

このように連句が盛になり、立派な作品がでるようになりましたこと、どんなに主人も喜びましょうか。

主人は、心からの俳人でございます。気持の綺麗な人でございます。亡くなりました詩人の父、西條八十とも無二の親友でございます。わたくしは、家のことが下手でよく叱られました。詩人の家からもらってくれ、連句・詩と形は違いますけれど、詩情ということにはとても理解が深うございまして、わたくしも詩の勉強を続けていかれたのでございませうよ。

「連句」はとても興味がございますので、いづれ、わたくしもお仲間に入れていただきたいと思っております。

これから、早速墓前に報告させていただきますませう。まずおめでとうを申し上げます。

連句の読み方・味わい方 (三)

—「木のもとに」の巻—

東 明雅

ほそき筋より恋つものりつゝ  
物おもふ身にも喰へとせつつかれて 水 翁

(現代語訳) ふとしたことから一途の恋になり、物思身は食事をする気にもならないのに、それに気付かぬ親に物を喰べよとつくつくすすめられるのはつらいことである。

(付心) 前句は恋一筋の女性。付句はその女性が親たちに気持を分かってもらえないで悩むさまを付けた「其人」の付け。

(付味) 「うつり」・「響」太田水穂氏が「芭蕉連句の根本解説」の中で、「ほそき筋」から「物おもふ身」への気分の移り、「恋つものりつゝ」から「せ」かれて「へ」の響を指摘しておられるが、まことにその通りである。

(補説) 「もの喰へ」・「せつつかれて」の俗語から、この女主人公は庶民の娘であることが連想される。このような庶民の恋が元禄三年ごろから多くなったことは芭蕉の「軽み」の説と無関係ではない。自分と親たちとを共に出しているから自他半の句と解すべきであろう。

物おもふ身にも喰へとせつつかれて 翁

(付味) 前句には女性の憂いの情が見られるが、これ以上恋を続けるわけには行かないので旅の句とした。「こはがる」という語に若い女性の移りが見られる。

(補説) 平家一門の西海落などの面影と見る説が多い。それとともに、家の内から外に出ている点に転じが見られる。

秋風の船をこはがる波の音  
雁ゆくかたや白子若松 水 翁

(現代語訳) 秋風に乗りに出た波の音を恐がる船客たち、雁の飛んで行く方角は白子・若松あたりでもあろうか。

(付心) 人情なし。其場の付け。「雁↓秋・舟路」(類船集)「三冊子」に「前句の心の余りを取て、気色に顕し付たる也」と述べてある通りである。

(付味) 前句の「秋風の」に、この句の地名ことに「白子」の白は秋の気であるところが自然に匂いあっている。

(補説) 「白子若松」という地名に自ずから白砂青松のすがすがしい気分があり、前句の「こはがる」という気分を消して、明るい気分になっている。旅愁望郷の念が全くないとは言わぬが、それを強調すれば折角の転じの苦心を無にすることになろう。

雁ゆくかたや白子若松  
千部説花の盛の一身田 翁 碩

(現代語訳) 雁が鳴いて帰るあたりが白子若松でもあろうか。折しも地上は花の盛りで、千部会を勤修する一身田

月見る顔の袖おもき露  
顧

(現代語訳) 恋に一途の身に、親たちからは物を喰え喰えとせつかれ月を眺める袖も涙の露に濡れるばかりである。

(付心) 物おもふ人の風情をあらわした「其人」の付けで、人情他の句である。

(付味) 「物おもふ身」と「袖おもき露」との間にはいかにも古典的な匂いが感ぜられる。

(補説) 「袖の露」は恋の詞であるから、この一句ははつきり恋の句であり、恋離れの句ではない。月の定座である。また、打越の句の境界と近く、三句の転じがあまり見られない。「なげけ」と月やは物を思はするかこち顔なるわが涙かな」の西行法師を面影にした点などに辛じて救いがあるが。

月見る顔の袖おもき露  
秋風の船をこはがる波の音 水 碩

(現代語訳) 月を見る女の袖は涙に濡れ、秋風に波が立つて船が動揺するのをひどく恐がっている。

(付心) 前句の人の様子を述べた其人の付け。人情他の句。

の寺は賑やかなことである。

(付心) ここは花の定座であり、絶対に花の句を出さねばならぬところ。しかるに前句は「雁」で秋である。秋から春への季移りは大変であるが、ここは秋に来る雁を春の帰雁にして、うまくこの難関を切りぬけている。これは翁が前句の雁を出した時、すでに花の句に対する用意がされていたのである。白子若松という地名に一身田という地名に応じた対付。

(付味) 前句の白子若松の気分のよさに、花の盛りの賑やかさ・明るさをもって付けた匂いの付け。

(補説) 「千部説花」には「花の盛り」と同じく満ち足りた感じがあり、ことに「一身田」という地名も千に対する一がおもしろい。釈教の句でありながら、このように明るく、華やかな花の句も珍しい。この句はもちろん人情他の句であるが、自他半にも取ることができるといえる。このあたりの付合のおもしろさは巻中第一であり、七部集の中でも傑出している。

千部説花の盛の一身田  
巡礼死ぬる道のかけるふ 水 碩

(現代語訳) 花の盛りの一身田で、千部説経の法会が行なわれたが、その寺のほとりで巡礼が行き倒れとなり、その屍のまわりに陽炎が香煙のようにもえている。

(付心) 前句の釈教に無常をもって付けているが、一句としては観相の句である。人情他の句。

(付味) 「千部説」が「巡礼」と、「花の盛り」が「死ぬ

「と、「一身田」が「道のかけろふ」と微妙に匂いあい移りあっている。これらが一句として溶け合い、花盛りの法会の賑やかでしかも何か哀愁をもった感じと、巡礼の死、それを巡る陽炎のはかなさとが絶妙の付味を示している。

(補説) 付味が絶妙であるとともに、この句は転じも絶品である。打越の明るさ・爽かさがうそのように消えて、人生のはかなさ・寂しさが胸にせまる。しかし、一方から言えば最高の死場所を得た者の喜びさえも感じられる。その点で無常の句であっても、じめじめした悲しみはない。それがまた読者の心を打つ。

巡礼死ぬる道のかけろふ  
水 翁

(現代語訳) 陽炎のたつ道のかたわらで巡礼が行き倒れとなって死んだ。その田りを蝶は飛びまわっているが、その無心の姿が一入あわれである。

(付心) 蝶が春光の中を無心に飛んでいるのを見ての観相、人情自の句。「かげろふ」からはかない「蝶」・「現」の余情付け。

(付味) 前句のはかない気分に応じた匂いの付け。

(補説) 莊子の「蝶の夢」では月並みで「蝶の現」なればこそ新しく、夢よりもはかない現のさまが観相として一句をひきしめて、気分はやや打越に通うところがあるが、景ががらりと転じていて、この作品の中の正巻である。

何よりも蝶の現そあはれなる  
水 翁

(現代語訳) 庭にひらひら飛びかう蝶を見ながらも、それをあわれと思うだけで、自分はあるの人に恋文を書く気力さえもない。

(付心) 蝶のうつつを見る人のことを述べた其人の付け。観相の句から恋の句へと転じた。人情自の句である。

(付味) 「あはれなる」が「力さへなき」に移っている。(補説) この句を恋病みの女と見る説が多いけれども、必ずしも女と限ることはなく、男としても十分通用するところである。ただ、これを病体とのみ見る説もあるが、

「文書く」とあるからには明らかに恋の句であり、恋患いの句である。いずれにせよ打越の気分がやや残って、十分の転じが利いていない。「鷹ゆくかたや……」の句あたりからのすばらしい付けが、この句によって一頓挫した形である。

文書ほと力さへなき  
水 碩

(現代語訳) 薄衣の下に、夏の日射しをお厭いになるたおやかなお姿を見ると、その方に対して恋文を書こうという力さえもなくなるのである。

(付心) 前句を女性として、この句を其人の付けと解する説もあるが、前句を男性、この句は向付による女性と見る方が変化もあってよい。人情他の句である。夏の句。恋句。

(付味) 伊藤正雄氏が「前句の『文』(紙)の薄さが『羅』に移り、『力さへなき』の消極性が『日をいとはる』と響き合っているのも見のがせない」と言っておられる(芭蕉連句全釈)のは鋭い指摘である。

(補説) 古注では「前句ノ自ヲ他ヨリ噂ノ付方也。雲上ニナシタル変化、其人ノ恋ル、人ハ、及ナキ宮人也トノ噂也」(暖台「秘注」)が最も当を得ているし、転じについても指摘している。このように、付味・転じ、ともに考えられて一応の効果は発揮しているが、長恨歌の「体弱力微若不任羅綺」を直訳したような付合になっているのが傷である。

羅に日をいとはる、御かたち  
水 翁

(現代語訳) 薄衣に日射しさえもお厭いなされる程の上臈が、恋人にゆかりのある熊野を見たいと悲しみの涙にくれておられる。

(付心) 其人の付け。類船集に「熊野——維盛入道參詣の心」とあるように、「平家物語」(巻十)にある平維盛の熊野詣とその入水、それを聞いた北の方の悲嘆、それらを面影にした付けであろう。

(付味) 「熊野みだし」としないで「熊野みたき」と連体形で余情を残した手法が、前句の上臈のかよわい姿を髣髴とさせる位の付けである。この点を最初に指摘したのは樋口功氏(芭蕉講座五)であった。しかし同氏は前句の人を高貴なあどけない男性と見ているのは納得がゆかない。

碩

(補説) 右の樋口氏の説にもある通り、この句の主人公を男性、花山院・久仁親王(増鏡)などに比する説は多いが、前句がはっきり女性であるのを、強いて男性に見立替えての論は採用できない。

熊野見たきと泣給ひけり  
水 碩

(現代語訳) 熊野詣に来られせむに泣かれる上臈に対して、紀の関守はあくまで頑固に拒んだことであった。

(付心) 前句の上臈に対し、頑固な関守を向付にしたもので人情他の句。「万葉集」(巻四)に、天皇の行幸に従って紀伊の国にくだる夫に贈る歌を、女にかわって笠金村が詠んだ「わが背子が跡ふみもとめ追ひゆかば紀の関守い留めてむかも」という歌があり、この付合にぴったりであるが、この歌がさほどポピュラーでないので、作者の発想に影響しただろうが、面影付とまでは言い得ないだろう。

(付味) 「熊野見たき」とあるところから紀の関守と移り、「泣き給ひけり」「頑に」と響かせている(浪木沢一「芭蕉七部集連歌鑑賞」)の通り、涙に濡れる上臈と頑な関守とのいわば演劇的な対比がこの付合の狙いである。

(補説) 打越からこの句まで三句、はっきりと人情他の句である。このようなことは、近世中後期以後(はつきり言えば北枝の付方自他伝以後) 忌まれたが、芭蕉の時代には、それほど厳格ではなかったし、また、同じ他の句でも女・女・男と変化しているから許されたのであろう。

## 八

牛耳連句を次のような三期に分けて考えてみる。

## 第一期 習作時代

昭和十八年—十九年

牛耳が芦丈に会ったのは十八年五月だが、その二月前、親友の岡部丹虹にさそわれ、芦丈指導の文音連句に参加している。連衆は伊東月草、中村竹邨、榎山梓月、天野雨山等当時の一流の人、この半歌仙「花」も、『この一路』にのっている。その一節に

遠山見えて井水噴く里

鎌倉 梓月

撞き出だす鐘に驚く背の猿

東京 雨山

横にひきぬくモツの焼串

同 牛耳

とあるが、この「横にひきぬく」が牛耳が案じた最初の付句であり御自慢の短句であった。

また芦丈にさそわれ、この年十二月信州松代で興行された芭蕉二百五十年遠忌正式俳諧に参加している。

しかしこの期間は、文音に参加したり、二、三の連句興行に列したりはしたが、本業の作家業の方が忙しかったので、戦況の深刻化につれ、郷里の鳥取へ十九年六月疎開す

んで行く。

そのやや後の海音寺亭の連句会は二年余続き、牛耳は益々上達してゆく。当時は旧派のいわゆる田舎宗匠の付けが多かったから、牛耳連句は冴えていた。

すこし後の事だが、海音寺潮五郎作『天と地と』がNHKから放映されていた四五年頃、酒を酌み交わし連句談議が弾んでいた折、海音寺の句にたちどころに五句を付けてみせ、

「どうです、この付味は……」

とやや得意気に示された。私はその付句よりも、その時の牛耳さんの顔に、連句のたのしみをみた、と今も憶えている。

その時の付句は次の通り。潮とは海音寺の俳号だ。

一本の松ただけし枯野原

潮

凍てつく月の海へ傾く

牛耳

猿銃抱く指のマニキュア

纏担いで戻る昼火事

雪空をゆくロザリオの尼

脱走相撲フグ鍋に泣く

牛耳は都心連句会を、発足からなくなるまでの十五年間熱心に指導されたが、しかし、現在の都心連句会に牛耳調が残っていないのが惜しまれてならない——もともと、牛耳に私淑していた池田豊城、田村無徑、三井武翁、山路閑

るまでの一年余りに関係した歌仙は六巻くらいだった。つまり牛耳は連句を知ったというにすぎない。しかし芦丈の指導をうけたのは、牛耳の幸運であったばかりではなく、戦後の連句界にとって幸運だったと思う。

## 第二期 ゴロー連句会—都心連句会時代

昭和二十四年—四十六年

牛耳が鳥取から上京したのは二四年六月だが、その頃の彼の周辺には連句に手を染めてる者は一人もいなかった。小説の方も、戦後はジャーナリズムに大変化があった。

彼が戦前、戦中に構想をこらしていた海洋を舞台とした野心作も世に出る見込みがなくなったのに失望して、半ばヤケのヤンパチ（と牛耳は随筆に書いている）で観音崎のそばの漁村に一室を借り、月の三分の二は魚釣りをしつゝす明け暮れ。要するに戦後の十年間は連句とはまったく断絶していたわけだ。

二十九年に戦前から交友のあった松代の清水瓢左が東京の柴又に移転してきた。どちらも急ぎの仕事を持ってないので毎月対吟して一年あまりに歌仙を三十余巻く。またその間に数回上京された芦丈を囲んで三吟をやり、牛耳の連句は忍ち上達するとともに抜きさしならぬ深味にはまりこ

古等が相ついで亡くなっているので止むを得ないのかも知れないが。

## 第三期 東京義仲寺連句会時代

昭和四十六年—四十九年七月

第一回 俳諧時雨忌興行の折の牛耳捌きの魅力から生れた連句会の連衆にはジャーナリスト関係者が多いので、みな牛耳連句の文学調に心酔し、牛耳得意の空擽にあこがれている。

牛耳直門の数人はそれぞれ一派を率い月例会を持っているが、いずれも牛耳調というので、俳人連句など、やや趣きを異にしている。

最後に、牛耳連句を総括的に批判した東明雅の一文を付記しよう。（曼荼羅第六号—昭和五十年八月）

「空擽」は一見易きに似て、常に危険を伴う。また、牛耳先生は生前、後進を指導される時、付合の人情の有無・自他の関係、その取扱いに極めて厳格であった。しかし「摩天楼」の作品評、及び「涿々滴々記」では殆んどこれに触れられていない。これは後人に誤解を生む因とはならないか。「摩天楼」の牛耳連句に私淑する私も、これらの点は十分注意しなければならぬと自戒する次第である。

「季刊連句」のバックナンバーとり揃えてありますので御希望の向きは発行所へ御申込み下さい



絶頂の城

付勝練習歌仙

東 明 雅

投句締切 1月20日

嘘のキッスが本物となり  
親が居て子が居て電話ままたらず  
ばりばりと炒るちぎり菫蕪

昌子 妙子 千町

十一句目  
治定角乗りを終へて後師まづ一献

杉亭

1 空の旅にはかに恐しカナダ行

麻子

2 上州の機屋に荒ぶからつ風

孝子

3 折角の豪邸なれどコアラの汁

貞子

4 酔痴れてあなめあなめと唱ふ番僧

みづゑ

5 草津の湯今も古風に湯もみ唄

淳子

6 勝山といへる地酒が妙に合ひ

妙子

7 夜もすがら事故機見廻る消防士

力

8 七回忌形見の品も手離して

天留子

9 ワンカップ庫裡の裏道そつと抜け

哲

10 作務僧の真一文字に口むすび

美子

11 レオタード着て出る腹のあからさま

黄俊

12 交番の前をとほれぬ身となりて

遊

13 喉すべる無名二級の純米酒

東夷

14 古都税を葦酒通して稼ぎ出し

和子

15 フェノロサの仏徒となりし園城寺

千町

ぎる。5は中七の「今も古風に」が何かしっくりしない。  
6は付味・転じ十分である。地酒という語が利いている。  
7も時事の句、付味はよいが気分の転じ不十分。8も同じ  
ことが言えよう。9も酒と釈教が出ておもしろいが、やは  
り転じが不十分。10もおもしろい。もともと、菫蕪に釈教  
を付けるのは「終宵尼の特病を押へける 野坡」「こんに  
やくばかり残る名月 芭蕉」(炭俵)のすばらしい付合が  
あるので、それが頭にすぐ浮んでくるが、この10は付味悪  
くない。11はすばらしく現代的だが、エアロビックスをす  
る人がダイエットの為のちぎり菫蕪だと見ると近すぎる。  
12は付心やや不明。13は無名の二級酒という所が位の付け  
であり、転じも悪くない。14、菫蕪と釈教は前にも述べた  
通りだが、この句は酒と時事の句も兼ねている、時代批判  
も見られるおもしろい句である。15は釈教プラス菫蕪に、  
思いもよらぬ外人の名と園城寺という個有名詞を入れたと  
ころがおもしろい。16は遭難日航機操縦士の悲痛な最後の  
交信をそのまま叙したもので、それをテレビで聞いて断腸  
の思いで料理しているのだろう。一種の向い付けでおもし  
ろいが、これも1と同様、何年かたれば忘れられ、意味が  
分からなくなるのではないか。17は付心は分かるが、転じ  
がやはり十分でない。18は菫蕪を炒っている其人の付け  
が、ちょっとそぐわぬ感じがする。19もおもしろい表現に  
はひかれるが転じが不十分。20は一種の機智の句で、一句  
としてはおもしろい。「FRIDAY」が日曜日になってや  
っと到着する辺鄙で不便なところに任んでいる身と、土く

16 アネイブル コントロール アネイブル 嘉彦  
17 歯切れよき角栄節も今は病む 一青子  
18 金髪を掻き揚げながら朗読す 清之  
19 吾輩は漱石といふ胃腸病み 昌子  
20 「FRIDAY」門司で売るころ「SUNDAY」に篤子  
21 休肝日とんと忘れて梯子酒 由美子  
22 祝盃を猫にも注ぎ虎ファン 隆秀  
23 ビードロの犬を磨きぬセーム皮 あかり  
24 新宿にまたのっぽビル建つといふ 智子  
25 送別の膳もとのひロスの膏 正江  
角乗りとは、東京深川の木場などで浮かんだ角材の上で  
労働すること、また、種々の演技を行なうことである。こ  
とに勇み肌のが若い者がせいっぱいの技を競うのは見事で  
ある。演技を披露し、あるいは労働を終った後師がほつと  
して、酒をキューと呷る、その着にはばりばりと炒ったち  
ぎり菫蕪などが最も適当だろう。珍しい題材である。打越  
のままならぬ気分から一転して気持よき、勢のよさがみな  
ぎっており、響きの付けあるいは位の付けとよいてよい。  
下五が字余りになっているが気にならず、後師の口ぶりが  
うかがわれておもしろい。1は日航機墜落に関する時事の  
句、同感はあるが、これだけでは何年か経ったら理由の分  
からぬ句になる恐れがある。2は治定の句とともに戸外の  
句で付味は抜群であるが、敢て言えば上州と菫蕪が近すぎ  
る感もしないではない。3も時事の句だが打越からの気分  
の転じが弱い。4は酒と釈教が出ているが字余りがひどす

さい菫蕪の料理、それは一脈通うものがないとは言えない  
が、すこし放れすぎている感じがする。21もおもしろい。  
休肝日を忘れて梯子酒をする。そしてその一軒の居酒屋で  
はちぎり菫蕪を炒っているという向付の形であろう。ある  
いは、亭主が休肝日を忘れて梯子酒をして帰ったので、奥  
さんがぶんぶんして菫蕪にあたり散らしているのか。後者  
と見ればユーモアがあつて転じも十分である。22虎ファン  
はもちろんな阪神タイガースのファンであろう。その熱狂ぶ  
りはテレビや新聞で報道された通りで、轟員のチームが勝  
てば晩酌がうまいのは当然だが、その祝盃を猫にまで与え  
るといふのは滑稽で、俳味がある。気分も転じていてよ  
い。23は同じく四足を出したが、セーム皮でビードロの犬  
を磨くというのはいかにもハイカラで、ちょっとちぎり菫  
蕪をお惣菜にする庶民とは位が違うように思われる。24は  
永年の懸案がやっと決定して、四・五年先には新宿に都庁  
舎が建つといういわば時事の句であるが「建つといふ」と  
いう表現に、何か他人事のようなよそよそしさと、その事  
に対して、ちぎり菫蕪を炒りつけている庶民の批判・反撥  
めいたものが感じられる。その点で、気分的に打越の句か  
らの転じが弱いとも言えよう。25は場所を海外にもって行  
ったところが目新しい。しかし、何かおとなしすぎるの  
か、前句との付味が今一つである。  
次は裏の六句目の短句。前句が人情他、打越が人情自  
であるから、人情他、人情自他半、人情なしの句なら何でも  
よい。雑でもよいが冬季を出してもよい。

第五回俳諧芭蕉忌

初時雨 脇起り六歌仙

恒例の芭蕉忌を十月十六日、深川芭蕉記念館で  
修し、六歌仙を首尾。参加者二十八名。

第十五回猫蓑会 幹事

桜井天留子 捌

氏原 正雄 捌

中島啓世 捌

けふばかり人も年よれ初時雨	翁	けふばかり人も年よれ初時雨	翁	けふばかり人も年よれ初時雨	翁
散りてひとしほ牙ゆる山茶花	天留子	散りたる上に積る山茶花	正雄	巷をよそに紙衣擦る句座	啓世
大皿に河豚刺しうすく盛りつけて	貞子	街角をとべるは冬の燕にて	遊	竹馬の子供露地より集ひ来て	杉亭
隣の席の話気になる	徒司	何時もの豆で朝の珈琲	子	夕餉の匂ひ隣よりする	昌子
島を去る遊覧船に白き月	和世	はるばると来て観月の宴となり	弘	月面をよぎりて鳥の渡りゆく	久美子
えのこぐさ振り帰る子供等	貞子	のそと現れたる大き蟻螂	麻	今を盛りとゆれる白秋	節子
雁渡し母をやさしくかばひつづ	世	指からませて肩の幼き	雄	一枚の秋の簾を巻き取め	昌亭
ピアスの痛み何故か気になる	司	秋色の深き阿羅野に影ふたつ	麻	育ち隠して袂をとる女	昌亭
約東のデートとうとう反古にして	天	指からませて肩の幼き	遊	居統けて煙草をふかす果報者	昌亭
底なき沼の藤間紫	司	制服の下に眩しき乳房秘め	同	金属疲労きたす心臓	久昌
津の国の生田の里のものがたり	貞	風を孕みし白きカーテン	遊	ジェット機で女性上位のロンドンへ	久昌
		葉包紙折鶴たまる枕元			

夕餉のけはひ豆を炊く路地	司	ぼんぼん船で下る大川	雄	カルチェ・ダンヒル・フワフワ	節
打ち連れてナイターに行く月まろし	貞	月涼しビオラダガンバを独り弾く	遊	浜小屋の鯉井屋の月	昌
高層ビルに用す風鈴	世	びいどろの壺赤く光りて	麻	輪島の海女の乳房たくまし	亭
棚にのる裏漕ぎの破れ居り	同	玉子焼最後に食べる戦中派	同	マスクミにのせては稼ぐ仕掛人	久
一日五食たべる中三	司	もうこれ以上肥れませんよ	弘	上の方より神の声降る	昌
花賞つる明治大正顔集ひ	貞	命ある限りは生きて花狂ひ	麻	内陣にわれも座しをり花の寺	亭
春愁歌ふ小諸古城址	司	火の舌のびて野火の拡がる	遊	春の夢見るうつらうつらと	久
僧の前縁起ながなが目借り時	貞	雛の酒類そめし吾子己に似て	弘	遠足の列に割り込む斑の猫	節
補聴器忘れ若返る婆	天	まだよまだよと貯金たまらず	麻	打ちまくったり虎の一年	久
中年の恋は不倫の匂ひして	明雅	いぢめつ子いぢめられつ子落こぼれ	雄	「六甲の嵐」を唱ひ美酒に酔ひ	亭
夕暮族は今も盛りよ	世	竹の子族の群るる公園	弘	風呂吹大根串さしてみる	昌
幻の「越の寒梅」海渡り	同	しほらしく胸のロザリオまさぐれる	遊	大ぶりの甕と平皿古厨	久
モスクワの冬アルコール抜き	天	「パセリ」恐れて見合い百回	同	パソコンの妻ロリコンの夫	明
初心者のマークで乗りしワーゲン車	貞	離婚二度今は不倫の恋に酔ひ	弘	震度5と4の境ひ目しがみつ	昌
川上宗薫忽然と逝く	世	女盛りは五十過ぎより	遊	明日になれば知らぬ顔して	久
大統領癌の手術の幾度か	雅	週末は雨になる癡神の留守	麻	虫が鳴き蚯蚓が鳴いて里の秋	同
色刷新聞日曜の卓	貞	つながれし犬所在なく居る	遊	竹伐る音のひびきくる頃	同
月浴びていよよ臆たし菊人形	司	グラウンドの照明消えて仰ぐ月	同	老人のベンチで憩ふ宵の月	久
猫を抱きて残る蟲聞く	世	玉蜀黍におしたじを刷く	雄	山ほどになる手つかずのこと	亭
くるま座になつて川原の芋煮会	司	音もなく寄りくる汐のそぞろ寒	遊	深海にタイタニックの瑠璃光る	同
何すすめても今減量中	貞	念仏となへ托鉢の僧	麻	鼻をぶつける鉢の小魚	同
人世にA面B面C面も	同	ふるさとの無人の駅に降りたちぬ	弘	両の手で写真の孫を撫でる祖母	亭
ダッチロールの晩年の日々	可	乾鱈つるす広き砂浜	麻	母さんバレー僕は塾ゆき	同
歩みぞめ花びらの渦追ひかけて	天	係達に取り囲まれて花吹雪	雄	忘れ得ぬ味問野の奥花吹雪	世
道祖神笑む陽炎の道	世	手のひらにのせ蚕遊はず	弘	見えかくれする白き蝶々	久

式田和子 捌

福井隆秀 捌

秋元正江 捌

けふばかり人も年よれ初時雨  
厨ことと匂ふ雑炊  
歩道橋外車疾走続きぬて  
敷伸ばしつツポスターを読む  
挨拶の姿よろしき月の宿  
昏に眺ねる青きすいっちょ  
待ち兼ねの秘蔵の古酒の栓を抜き  
剃りを入れたる少年の頃  
ウエイディングドレス昨日の日記焼く  
裏木戸押して覗くお隣り  
やらせではないと慌てる報道陣  
カラープリント仕上げ群  
月さして螺鈿涼しき提げ簞笥  
深川どぜう丸で喰はされ  
先端の技術革新追いつけず  
東大法科卒が売物  
チビ玉の見栄を切りたる花見傘  
おとづれ遅き春の峠路  
小綬鶏の声消へぬ間に次を啼き  
落ちこぼれあり吹きこぼれあり  
ロンドンで仕入れフルハムロード開け

翁 けふばかり人も年よれ初時雨  
子 鳩鳥もめてしづもれる林泉  
一 総身のゆるび付ちたる焚火にて  
孝 アユ一丁で聞かすシヤンソン  
東 街道のすすき穂に出て淡き月  
夷 茶店ですする新蕎麦の味  
孝 横顔のシモーヌに似し秋扇  
夷 銀のマニキュア黒のベディキュア  
一 抱きしめてしかと重たき抱きこち  
一 いけませんたら猫の爪とぎ  
同 化けそうもなき洋傘を借りる寺  
一 河原なでしこ咲ける夕暮れ  
孝 山鏡の月をかすめてこんちきちん  
一 「酒ほがひ」手に微醺帯びたる  
同 通勤のラッシュ過ぎたる環状線  
一 空気の缶詰おみやげにくれ  
夷 ひたすらに花に憑かれて受けし賞  
一 耳を澄ませば亀の鳴く声  
夷 遠き世の踏絵のマリアおぼろなる  
孝 ポスター誘ふ雲仙島原  
遊園地回転木馬に掛けてをり

翁 けふばかり人も年よれ初時雨  
秀 木守柿のともしたる紅  
隆 雪兎はりと融けて剃り盆に  
みづ多 一字の雅印うまく仕上る  
千 月明り校長窓をあけ放つ  
同 梁にすがりてちつち蟬なく  
同 茸飯ほのかに匂ふ空気が吸ひ  
同 沖にどっかり佐渡ヶ島見ゆ  
同 親も捨て故郷も捨てて追ひて来し  
同 混血少年透明となる  
同 御絵札のサンタマリアの影褪せて  
同 土産物屋に遊びるちゃぼ  
同 しろがねの月光浴びて莫産に臥す  
同 納得できぬ震度5の揺れ  
同 老彌宜は髭を撫でつつ飲む紅茶  
同 豆と砂糖の違ふ金鏝  
同 蜂飼ひて旅から旅に花を追ふ  
同 亀鳴くことを頑と信せず  
同 鏡台の磨かれてをり風光る  
同 伊勢型紙の孔は無数に  
同 種々の胆石標本ながめをり

翁 正江  
子 淳子  
より てるよ  
子 あり

病床まはすエンマ、フォーカス  
寒稽古一言居士といはれつツ  
鋭き氷柱そだつ絶壁  
風の鞭鳴れば野性の血が騒ぎ  
若い男をなめつくす尼  
遺言に幸せだつたと書くつもり  
握りて帰る湯屋の釣銭  
月幾夜真向ひし瀧廉太郎  
小菊いっばい女生徒の挿す  
栗飯の含めば甘し母の味  
高軒がまたも火を落す町  
地震ゆりしあとの索漠砂の浜  
ふさふさの毛の猫に櫛入れ  
花吹雪神官奉仕神賀詞  
胡蝶の夢は明日ひらく夢

同 鞭振る美女に恋をする虎  
一 跪く如菩薩の足艶やかに  
夷 片小鬘をば剃り落とされし  
孝 隣室の気配うかがふ生くさめ  
夷 語り部語る槽の囲炉裏火  
孝 原罪を負ふて科字のいや栄え  
一 なるようになる阪神優勝  
一 夢ならぬ満月のぼる海の上  
同 うたた心に雁の棹  
同 身にしみる師の言の葉の今もなほ  
同 読み本狂歌江戸の文人  
孝 宵越しの金を取出すうん万円  
同 温泉つきのナウイマンション  
同 北国に花移りたる花便り  
裕 練ぐもりに勇む鉢巻

同 夫への苞に地酒厄除け  
同 仮面劇小栗判官照手姫  
同 毒と知りつつ舐めるベディキュア  
同 冬薔薇ことば忘れしごとときひと  
同 岬の果の生家たづねむ  
同 転轍機かはりて触るるくもの糸  
同 餓鬼大将とあげる喚声  
同 宵の月尾をたてし猫すりよりて  
同 オクラさざみでねばる包丁  
同 繰り返す昔ばなしのそぞろ寒  
同 酔ひ止めもたせバスに送りぬ  
同 湖の淡水真珠ふところに  
同 窯出ししたる窯変の壺  
同 花冷えのことに淋しき山ざくら  
同 朝のまだきに雉のほろろと

翁 江  
雅 子  
より 同  
子 同  
より 同  
子 同  
より 同  
子 同

東 明 雅 著

# 連句入門

# 芭蕉の恋句

中公新書 508号  
価 五〇〇円

岩波新書 91号  
価 三二〇円

# 猫

# 蓑

永田書房  
価 二三〇〇円

# 好色五人女 好色一代女

小学館  
価 一九〇〇円

